

第5回利賀ダム環境検討委員会 議事要旨

開催年月日／会場	議 事	出席委員(敬称略)	議事要旨	
平成 20 年 3 月 19 日 バレブラン高志会館 嘉月 (富山市千歳町)	①2007年工事の実施状況及び2008年工 事の概要 ②生物 ③水環境 ④環境レポートの進捗状況	阿部 學(日本猛禽類研究機構 理事長) 大串 龍一(金沢大学名誉教授) 高倉 盛安(元富山県立大学短期大学部長) 田中 晋 (富山大学名誉教授) 長井 真隆(元富山大学教育学部教授) 中村 浩二(金沢大学理学部教授) 湯浅 純孝(富山県自然博物館ねいの里 館長)	絶滅危惧種の植物の保全措 置の検討について	<ul style="list-style-type: none"> ・絶滅危惧種の植物の内、保全対策が必要な植物の移植に関しては、自然環境下に適地があるとすれば既に生育している可能性が高い。人間が移植を行うのは非常に難しいことである。適地を探す場合は湛水後にダム湖に船を浮かべ、周辺を調査する等の努力が必要になるだろう。 ・また、範囲にとらわれず、広範囲で探せば他の生育地や適地が見つかる可能性もある。 ・湛水までの期間も延びたようであり、現段階では増殖を確立させ、その後の増殖管理の計画をしっかりと検討することが重要である。増殖できても管理体系が整っていないと失敗に終わるので、地元自治体等の意思を確認し、増殖のソフト面の整備を具体的に進めていく必要がある。
			湿地性動植物の保全措置の 検討について	<ul style="list-style-type: none"> ・湿地環境整備地区(ビオトープ)は必ずしも池が必要なわけではない。保全対象となる種によって必要な条件は変わってくるものであり、複数種をいっきに保全しようと考えればいいものではない。 ・調査で確認できる生物の生息・生育状況はあくまで断片的であることを忘れてはならない。ビオトープ調査などは1日程度の調査で生物の有無を判断しようとしているが、その日の天候等によっても、たまたまその時に居たり、居なかったりするもので、一時的な調査結果だけでは生息・生育状況を判断できない場合もある。 ・土捨て場を整地するときに地面を平らにしてしまったことで、なかなか植生が発達しない状況になった事例がある。そのあとにたまたまできた土砂の山の周辺で植生の発達がみられた。 ・工事後の整備の際には、可能ならば、多様な環境を創出するといった視点も検討すべきである。